

今、大切にしたい保健の取組

伊丹市立荻野小学校
主幹教諭 小林 理加

1 取組の内容・方法および成果

養護教諭として、2市の中学校で27年の経験を積み、小中連携の大切さを強く感じた。その後6年間、小学校で執務を担ってきた。これまでの主幹教諭、また養護教諭としての経験によって培った自己の強みを活かした取組を2点報告する。

取組1ー学校内における心停止への対応訓練の実施

<背景>

学校において発生しうる心停止への対応には複数の教職員が連携して対処することが不可欠であるが、教職員が各々の役割を果たしながら対応するというシミュレーション形式の学習機会は依然として少ないのが現状である。そこで、警察署の協力のもと大阪教育大学附属池田小学校の教訓を生かし、安全面の向上及び実効性のある安全対策を目指して、不審者対応訓練を実施し、マニュアルの検討、訓練の改善など「安全教育」の重要性を再確認した。

一方、複数の児童が同時に負傷した場合や児童が心肺停止になった場合の対応については、マニュアルやアクションカードを作成しているものの、実際の場面で教職員が連携して動けるかどうかはわからず、訓練の必要性を感じていたところであった。

<目的>

心停止を想定したシミュレーション・トレーニングを行い、心停止が発生した際の対応に関する基本的事項を習得し、心停止対応に関するシステムについて本校の改善点を見出すこと。

<取組内容>

A. オープニング

目的・概要の説明・参加者の紹介（医療機関・消防機関・学校）

教職員対象の研修であり、「教える」のではなく「気づき」を主眼に研修を構成。

B. 心肺蘇生法デモンストレーション

学校で人が意識を失い、倒れているところを発見した場合に教職員がとるべき行動を想定した。

ファシリテーターが心肺蘇生法を実演し、次の4点について確認し共通理解を図った。

①心肺蘇生法の手技とアルゴリズムを確認

②心肺蘇生法の手順の理解と再確認

③複数の教職員が連携して救護活動を実施する重要性の理解

④迅速かつ効果的な心肺蘇生と救急隊への傷病者引継ぎに必要な要素についての理解

・AEDの設置場所と使用までの所要時間

・校内における連絡手段

・救急車の誘導等

C. シミュレーション・セッション（模擬訓練）

事案発生から救急隊到着までの約10分間の対応において、上記Bでの学びを実際の現場で実践する訓練を実施した。

D. ディスカッション・フィードバック・Q&A

デモンストレーションと模擬訓練を通し、参加者間での振り返りと今後の安全対策の向上に向けた協議の場を設けた。

<成果と報告>

今回のシミュレーションでは、医療機関、消防機関、養護教諭間において事前に綿密な計画とシナリオを作成し、参加者に期待される行動も考えられていたが、一方で参加教職員にはシナリオは知らされず、役割は直前に発表することで、実効性のある研修になるよう設定していた。

本校では、緊急時の対応はアクションカードを使うようにすべての場所（教室、特別教室、体育館）に設置し、研修も行っていたが、今回のセッションでは、正しく使われていないことが分かった。そのため事故発生時、現場に人が集まらず、緊急時の対応の連携がうまく行えなかった。また、初期対応から救急車到着、引継ぎまでの様子をチェックする役割を設定した。現場と職員室をビデオ中継で繋ぎ、職員室の動きを見ながら観察者がチェックリストを使うことで問題点が明らかになった。さらに、医師・救命士から評価とアドバイスを受け、課題を確認することもできた。

今回の訓練は、教育委員会の担当者を通して市内の学校、教育委員会内にも見学参加を呼びかけていただいた。その結果、後日医療センター救命医師に養護教諭対象の研修会で講義していただくことができ、市内の各学校で同様の訓練やアクションカードの活用に向けた取組が広がっていった。

アクションカード（例）

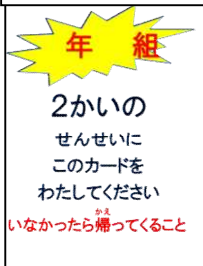
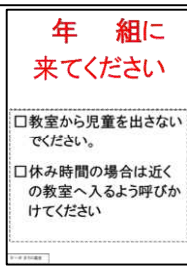
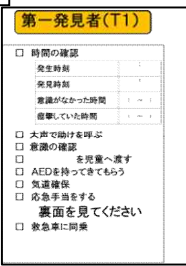
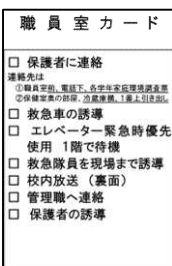

連絡（黄色）カード・・・事故発生現場（教室等）で、児童に配り各階フロア教職員へ事故発生を知らせ現場に人を集める。

役割分担（黄緑）カード・・・集まった職員で分担し、カードに記された内容の任務を果たす。

職員室（ピンク）カード・・・本部、119番通報（確認）、保護者連絡、校内放送など

事前（場所）確認カード・・・緊急連絡票、AED、救急救命鞆などの設置場所を表示

資料 アクションカードの一部

				
---	---	---	--	---

取組2－足育（あしいく）指導＝足元から考える子どもたちの健康

<背景>

近年、生活環境の変化や運動不足または過剰な運動によると思われる足のトラブルを訴える児童が増えている。身体の土台となる足を健やかな状態に保つことは、全身の健康に

もつながると言われており、成長発達の過程にある児童に大きな影響を与えると考えられるが、足のトラブルは靴の選び方や生活の仕方、運動等を見直すことで改善が期待できる。

本校においても、保健室に足の不調を訴えてくる子どもが増えた経験から、初めての小学校勤務となった6年前から足育指導に取り組んでいる。

①土ふまずの有無

土ふまずの完成は10歳前後と言われており、「土ふまずができていない」児童は全体の約80%であった。「完成していない」、「扁平足の可能性がある」は20%程度みられた。



土ふまずの形成は個人差が大きく、きれいな土ふまずができていない児童がいる一方、扁平足気味で足裏がほぼ写ってしまう児童もいた。

②浮き指の有無

足の指が浮いてしまう浮き指は、力の入らない指があるということであり、約半数の児童にみられた。

③母趾角度

母趾角度においては半数以上の児童に注意が必要という結果になった。なかでも、母趾角度15度以上の児童が14%みられ、痛みが出るなどした場合は、外反母趾の可能性が高いと言われている。

④足のバランス（足の形）

足のバランスは「足幅が広く、踵幅が狭い」形が理想的とされている。今回の調査ではこのタイプは40%に満たなかった。さらに、バランスがよくないとされた児童のうち約70%が「足幅が狭く、踵幅も狭い」状態だった。活動量や筋量が少ないことが原因であると考えられている。

⑤足幅

市販されている児童用の靴はほとんどが「E」、「EE」であるが、児童の足は「E」よりも細い足幅（BB・B・C・D）が約31%、一方「EE」よりも広い足幅（3E・4E・F・G）が約28%とサイズの幅も広く、個人差が大きい。

⑥足長計測と今履いている靴との適合調査

簡易足測定器の計測結果と今履いている靴のサイズについて調査したところ、「だいたい同じ」と回答した児童が最も多かったが、「大きい」「小さい」と回答している児童もおり、女子については46%が合っていない靴を履いている結果となった。

<目的>

足の構造・機能や適切な靴の履き方・選び方に着目し、足や靴についての課題を比較・分類し、指導を工夫すること

<取組内容>

初年度は、本校の6年生の児童及び保護者にアンケートを取った。簡易計測器（写真1）とフットプリント（写真2）で子どもたちの足の現状を分析し、児童・保護者・職員に結

果の報告と足育の必要性を伝えた。また、保健室掲示板を足育テーマに取り上げ、児童集会で保健委員会が足指体操と正しい歩き方の紹介をする、「ほけんだより」に足育コラムを連載するなど全校生と保護者に発信していった。

本校での2年間の取組を市内養護教諭会で報告し、賛同を得て次年度からグループの研究課題として取り上げた。本校での取組をもとに、伊丹市内の児童の現状を分析した。

足育指導はアイデアを出し合い、各学校の状況に合わせたものに改良しながら進めていった。そして、研究グループ2年間の取組を「足元から考える子どもたちの健康」をテーマに伊丹市学校保健大会で発表し、保護者、学校関係者、医師会、歯科医師会、薬剤師会などにも啓発することができた。

写真1 簡易測定器



写真2 フットプリント



<成果と報告>

簡易計測器やフットプリント測定は、子どもたちが自分の足に興味を持つきっかけとなった。靴の適合については、簡易計測器の結果と使用中の靴サイズが違っている場合が多く、特に足幅や甲の高さを意識した靴選びができていないことがわかった。このような現状をふまえ、保健指導の保護者参観、児童保健委員会活動、保健だよりや掲示物などを通して、子どもの実態に応じた啓発ができたと感じている。

取組の結果、自分の靴を見直すなど、足について関心を示す子どもの様子がみられた。また、足指をしっかり動かす遊びを取り入れたクラスや家庭では、実施後の結果から足のトラブルの改善がみられた。

今後も、伊丹市養護教諭会研究協議会や伊丹市学校保健大会における体育の授業の工夫、外遊びの推奨など、取組を継続し子どもたちの健康を支えていきたい。

2 課題及び今後の取組の方向

子どもたちの体力・運動能力向上、学校における安全対策、危機管理体制の確立は喫緊の課題である。この課題に対し、養護教諭として「心停止への対応訓練の実施」「足育」の2点を中心にして取り組んできた。子どもたちのいのちを守るための「危機管理」「安全対策」については、今後も、教職員一人一人の心肺蘇生法の手技を高めること、医療機関や消防、警察等との連携によって、救命の連鎖を効果的につなげることを目指し、継続した研修が必要であると考えている。

「足育」については、日常生活の中に根付いてこそ意味のある教育活動といえると思っ

ている。そのために、校内研修等によって教職員の共通理解のもと、体育の授業の工夫や外遊びの推奨など、継続して取組を続けていくことが重要であると考え。さらに、靴選びなどは家庭の協力が得られるよう、今後も積極的なはたらきかけを続けていく必要がある。

これまでの取組は、子どもたちや学校の状況、課題を捉え、保健室として「今、必要なことは何か」「今、できる取組は何か」「大切にしたいことは何か」を考え、日々取り組んできたことである。そして、それを校内だけで終わらず、関係機関と連携したり、市内の養護教諭に伝えたりしたことで、伊丹市全体の取組として広げることができたのである。

今後も、自己研鑽を積みながら、子どもたちの健康と安全を守る養護教諭として、関係機関との連携による校内研修、市内養護教諭研修の充実に向け努力していきたい。